

発生医学研究センター

教授 桑 昭苑さん

Kume Shoen

## ●プロフィール

- 1981年 東京大学薬学部入学
- 1987年 同大学院修士課程を修了後、帝人（生物医学研究所）に入社その後、夫が大阪大学博士課程に入学したため、帝人を退社し自らも阪大博士課程で学ぶ
- 1999年 アメリカ・ボストンのハーバード大学に夫妻で留学
- 2002年 熊本大学発生医学研究センター教授に就任
- 2006年 文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業立ち上げに参画
- 2008年 男女共同参画担当の学長特別補佐に就任

# 企業に就職しても、研究者になれる。

## 細胞再生研究の第一人者として

桑昭苑さんが、研究室の同僚で夫でもある和彦さんと共に、熊本大学発生医学研究センターに迎えられたのは2002年。現在、発生医療技術の最先端である、ES細胞からインシュリンを分泌する膵臓β細胞の前駆細胞を作り出す方法を研究。そこで培われた技術をもとに発生医学への応用を目指しています。「重症糖尿病の患者さんは、インシュリンを継続して投与しても、血糖をコントロールすることが難しく、その結果他の臓器がダメージを受ける場合もあります。臓器移植も提供者に限りがあるのが現実です。そこで、膵臓β細胞をES細胞から新たに作り出すことを研究しています」

## 苦勞より楽しさを夫と共有する喜びの方が大きかった子育て

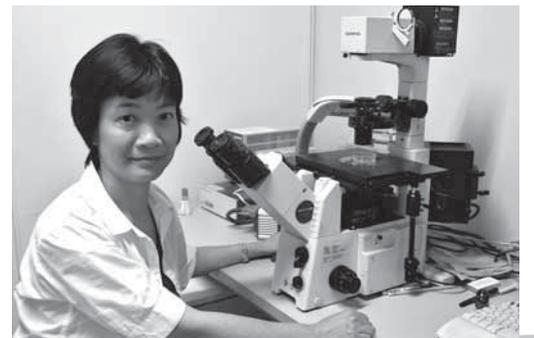
発生医学の最先端技術を研究する桑夫妻ですが、当然のことながら家事や子育てはお互いに分担しました。「子育ての苦勞より、楽しさを夫と共有する喜びの方が大きかったですね」しかし、実験中に保育園から「子どもさんの具合が…」などと実験を中断して駆けつけることも。男女共同参画社会を実現する上で大切なことは、いわゆる“ワーク・ライフバランス”であると。「時間配分を考えて効率的に仕事を進めることで、仕事と家庭の両立も可能です」と桑さん。「仕事をする上で両立することが困難な問題が起きたとしても、一時、何かを犠牲にしなければならないこともあります。自分自身で納得できる解決方法が見つかるはず。とにかく諦めずにやりたい仕事を続けることが大事です。」

## 全学的な委員会が組織され、全学的な方針が打ち出された大きな意義

今、桑さんは学長補佐という立場で男女共同参画を推進する立場にいます。アプローチとして、子育て期間中の女性研究者を重点的にサポートすること。例えば、研究者に補助員をつけることにより、研究に集中してもらうことで1.5～2倍の研究を行ってもらえる。熊本大学では初年度である平成18年度から延べ9人の女性研究者が利用しました。短時間勤務制度・在宅勤務制度などの環境整備も全学的な制度の導入となり時間を要するものもあるが3年間の文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業で立ち上がるよう進めているということです。もう一つのアプローチとして、女子高校生に理系の進路選択をサポートすること。夏休み期間中、2日間の体験講座を行うなど情報提供を行っています。

「女性研究者支援モデル育成」事業がきっかけとなり、意識改革のシンポジウムが開かれ、全学的な男女共同参画委員会が組織され、全学的な方針である大学の男女共同参画推進基本計画を打ち出したことは大きな意義があったといいます。学長と女性研究者を囲む会も2回開催され、少しずつではあるが環境の整備や意識の浸透が図られてきました。女性研究者を国レベルや大学で支援する機運が高まっています。働きやすい制度を取り入れている企業も増えてきました。

これから研究者を目指す女子学生へ「たとえ回りに前例がなくても、諦めずにやるのが大切。私も一度企業に就職しましたが、また基礎研究がしたくて大学に戻りました。回り道をしていろいろな生き方があります。ただ後悔だけはしないようにがんばって研究者になって欲しい。」とエールを送られた。



ヒトES細胞培養室の前室にて